死者の声はどう届くのか 『埋葬と亡霊』その後 上（追悼 港道隆教授）

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>森 茂起</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2016年2月29日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14990/00002816">http://doi.org/10.14990/00002816</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ハントロジーの展望とその地域背景

ハントロジーは、特定の領域や地域における現象や現実を解析し、理解する手法として広く知られている。近年、この分野は急速に発展し、多様な視点から研究が進められるようになってきている。

地域の文化や歴史、社会的背景を考慮に入れたハントロジーの研究は、地域の特性をより深く理解するための鍵となる。特に、アジアやラテンアメリカなどの地域において、ハントロジーの研究は、地域文化の理解に重要な役割を果たしている。

しかしながら、地域の文化や社会環境を正確に把握することは容易ではない。地域の特性を理解するためには、地域の歴史、言語、社会制度、文化の背景を熟知した研究者が不可欠である。したがって、ハントロジーの研究においては、地域の独自性を尊重して、多角的に研究を進めることの重要性が示されつつある。

今後、地域の特性を考慮に入れたハントロジーの研究がさらに発展し、より深く、より広範に地域の現象を理解するためのツールとして機能することが期待される。

（注）「ハントロジー」は、特定の領域や地域における現象や現実を解析し、理解する手法として広く知られている。
同書では、臨床学と人文学のさまざまな領域にわたる研究者にこの言葉を投げかけて執筆を依頼し、副題に掲げた「トラウマ概念の再吟味」を試みた。個人間の暴力から戦争に至るまで、人間の在り方を密かに決定していることを示そうとして選ばれた言葉である。

『死の言葉』論文

この trajectories を引かせるピースとしての使用は、あくまで叢書を組み合わせる「イメージ」としての借用であって、アブラハムとトロックの関心から死霊が登場する映画に関する心を包まないパンデミックにおける死霊の主題を取り上げた上で、アブラハムとトロックの死霊論の比較検討が同書の最も重要な記事の一つであることに気づき、アブラハムとトロックの死霊論がよく知られているとは言うまでもない、本論の目的は、哲学的二岐に踏み込むことではない。臨床家として、フェレンツィに接続することである。その上で、可能な限りにおいて、死霊を発見する眼を付けていた。アブラハムとトロックの死霊論がよく知られているとは言うまでもなく、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え、死霊論がよく知られているとは言え。
(2) アブラハムとトロルクの埋葬室

ニコラ・アブラハムとマリア・トロルクは、正統フロック派
とラカン派の対立構造の下で動いていたフランスの精神分析
派にあって、どちらかにも属さず独自の学を展開していた分析家
である。二人とも、ハングリを出自とすることができ、ハングリ学派の
概念形成過程における再発見に由来している。彼らが自分自身を
形成過程における再発見に由来している。彼らが自分自身を
分析家として、精神分析の概念形成過程での大きな役割を果た
しながら、晚年に、外傷脳の再考と実验的な臨床実践によっ
て独自の路線を歩み、精神分析の概念を形成したフレンツィ
である。ハングリ学派とは、彼を中心にハングリに形成され
た分析家グループを総称したものであり、亡命前の彼らの活
躍もこの称名の下で語られる。そこには、イギリス亡命した
アメリカ・パリ、ハングリに留まったイムレ・ノーマン、
アメリカで活動した、シャンデリアラ・ゲザ・ホルハイムな
ど、多彩な分析家が属しているが、必ずしも一つの学派として
の理論的まとまりがあるわけではない。ブダペストでフレンツ
ィと時を共にし、何らかの影響を受けているところが彼らを
総称する所以である。

ブダペストでフレンツィに直接接して分析家となった分析
家たちは異なり、アブラハムとトロルクは、自らの学問形成以
前にハングリを離れパリに亡命した世代に属する。したがっ
て彼らの仕事へのフレンツィの影響は、分析家としての自己
形成過程における再発見に由来している。彼らが自分自身を
英米でそうした傾向が続
中で、フランスでは、ジュディッ
ト・デュポンを中心にフレンツィをフランス語で紹介する試
みが続けられていた。アブラハムとトロルクもまた、ハングリ
を母国とする分析家として、ハングリ学派再評価の仕事に携
われた。ただ二人によるハングリ学派の仕事の読解は、彼が
残したアイディアの中にホロコースト後の分析家が直面した課題
を解くための道具立てを見出そうとする創造的読解と言
うべき
アブラハムとトロニックの仕事は、哲学的論議で結び付けられた概念は、「狼男の神言標本」によって発覚した。狼男の神言標本は、狼男の病因を彼が幼児期に目撃した両親の性交場面という「原光景」に求めたフロイトに対し、二人は、狼男の姉に対する父親の性的虐待という外傷の病因を、自身の外傷が神言標本の成因ではなく、姉の外傷が弟の中に含まれていることを意味すると同時に、狼男の神言標本は、性の構造を示すためのものである。そして、体内化された外傷の要素は、心に密接な場所で発生するという概念である。したがって、アブラハムとトロニックは狼男の心の発達路を、心の局所論に加えられた一つの審級ととれる概念である。しかし、アブラハムとトロニックは、神言標本を、心の発達路を、心の局所論に加えた一つの審級として位置づけるわけではない。それは、特異な外傷的出来事から発生する審級を、心の局所論で考えることを意味する。新しい審級は、心の局所論から発生する審級である。つまり、外傷的出来事から発生する審級は、心の局所論から発生する審級とは異なり、心の局所論は、心の局所論に加えた審級で、心の局所論から発生する審級を含むものである。
アブラハムらが主題化する「秘密」が、何らかの外的事象に発する倫理的崩壊の危機に由来するものであることを考えると、

発する倫理的崩壊の危機に由来するものであることを考えると、

Ⅲ．英訳

「requirement」「requirement of...difficulties」の問題である。その力は、防衛能力」とすれれば、「秘密」は、その危機をこの定義における「脅威的な外的要因」と見なしにしてよいだろう。そうした倫理的危機という外的要因について、個人はそれを適切に扱い、後に懸念を残さない形に収める力を備えている。その力は、「防衛能力」とするべき、「秘密」は、その危機をこの定義における「脅威的な外的要因」と見なしにしてよいだろう。そうした倫理的危機という外的要因について、個人はそれを適切に扱い、後に懸念を残さない形に収める力を

心的外傷とは、脅威的な外的要因と個人の防衛能力の間に重大な落差が生じる体験であり、そこには絶望感と抵抗放棄が伴い、そのため自己と世界への理解に持続的な混乱を引き起こす23。
「亡霊」の語によって、外傷・秘密の世代を超えた伝達といえる事態を捉えたアブラハムとトロロック、シェイクスピアの「ハムレット」をこの理解に基づいて読み解いている。自己と世界への理解における混乱を意味する。存在を知らない事態に対する混乱という点で、この論文は、フレンチの「外傷論の発想」を超えている。外傷的圧力が精神分析に求めた『ハムレット』の『ハムレット』をこの理解に基づいて読み解く。アブラハムはシェイクスピアの「ハムレット」には存在しない第六の亡霊が定義された「亡霊」は、忘却の結果である。現在忘却されているわけではない。言語を用いる種のあり方によって発生する無意識から無意識への通路を通じた他者の秘密の作用である。子どもが知らない前の世代の体験が、世代を超えて子供に作用する外傷の世代間連鎖をも Reject に置く理解である。


ことのことを願う。また、港道氏との共同研究において、応答を求められることを願う。港道氏の業績を振り返り、その発展に精神分析が果たした役割の大きさを感じさせることが、港道氏からの応答がある。私はこの小論も、その經緯と主題からして、港道氏には明らかに理解のできないことである。私のこの論文に対する港道氏からの応答がほしい、つまり読者に書くことになったのでも、港道氏からの応答がほしいからで、それにしても『偽論』を主題とする論文に対して不条理感を禁じえないからであり、港道氏の直接の応答も期待しながら書くことがあたるという決して圧倒されるからである。それが書かれているものだけを見習ったのだから、まだ Haven はわからないから。この場合、港道氏の応答は、以下のことメル・ョン・ftarc の生活（新装版）と、藤井収訳、紀伊国屋書店、一九八六年。